

『ドイツ統一から探るヨーロッパのゆくえ』

天理大学 EU 研究会編、法律文化社、2016 年

おやさと研究所教授
堀内みどり Midori Horiuchi

本書は2016年12月に発刊された。イギリスがEUからの離脱を決め「平和なヨーロッパ」構築を目指してきたEUにとっては、大きな局面に立たされることになった時期である。第2次世界大戦後、ドイツは東・西ドイツというかたちで歴史を刻み、1989年にはその分断の象徴だった「ベルリンの壁」が壊された。本書は、この出来事をメルクマールとし、戦後ヨーロッパの歩みを振り返りつつ、理念的「ヨーロッパ統合」を実現しようとしてきたEUの将来に目を向けた論文集となっている。

永尾教昭天理大学長はパリ在住25年で経験した「EC」「ベルリンの壁崩壊」「EU」という出来事を振り返りつつ、「ヨーロッパは、民族の移動、領土の奪い合い、宗教間の相克、イデオロギーの対立によるものなど、幾度も戦乱を経験し、その教訓として1つになる道を選んだ。ヨーロッパの国々が、平和に互いに存在しあっていくためには、これしか方法がないと言うことなのだろうと思う」（巻頭言）と言う。

そして、編集代表の浅川千尋は「確かに、EUの今後の動向はきわめて不透明な部分があるが、『欧州の統合』『戦争のない平和な社会の実現』『多様性の中の統合』というEUの理念は決して消え失せるものではないであろう。」（あとがき）と述べる。

「平和なヨーロッパ」への道は、まだ、途上であるかもしれない。今新たな問題を抱えているEUではあるが、EUへの期待は失われていないということが掲載された諸論文からも窺える。

第1章では、ジャーナリストである宮隆啓が、自らの取材ノートをもとに、国を捨てる人たち、東ベルリン、ベルリンの壁崩壊、東西ドイツ統一へという章を立て、場所を変え、時間を追ってドイツ統一の様態を報告している。東ベルリンで行われた100万人規模の静かな市民の行進がテレビで全国に生中継されていたこと、数日後にはゲートが全開されて消えたかのような国境検問所を抜け西ドイツへ入る東ドイツの人々。インタビューに「正気の沙汰とは思えない。信じられない」と答えた喜びの市民。ドイツ統一がヨーロッパの人々にとって非常に重大な意味をもった出来事であったことが臨場感をもって伝わってくる。

第2章で佐藤孝則は、このドイツ統一には実はハンガリーでの環境保護運動がかかわっていることを述べる。ハンガリーを縦断するように流れるドナウ川は国際河川の一つである。その流域に位置するチェコスロバキア（当時）と共同してダム建設を計画実行していく段階でこの計画が環境問題化し、市民運動となり、さらにその運動がハンガリー国内での政治に関与、その後のハンガリー・オーストリア国境の開放、その結果として東ドイツの人々の西側への脱出へと続いた。そして、これが「ベルリンの壁崩壊」の契機となったとする。こうしたダイナミックな動きはヨーロッパという地域でのものごとの連動を理解するのに大変役立つのではないかと思う。

また、第3章で取り上げられた「オラドゥール虐殺事件」(1944年6月10日)は、ナチスの武装親衛隊約150人によって村民642人が惨殺され、村そのものも焼かれた事件で、フランスではよく知られているという。ほんの数名だけがかろうじて生き残り、国レベルで独仏が和解してなお村民の心が開かれるまでには長い時間が必要となった。ド・ゴールは「フランスは決して

オラドゥールを忘れない」「この記憶は永遠に保たなければならない」と述べた(1945年3月)という。この事件の背景、その後の経緯について読み進めると、当時4歳で村はずれに住んでいたため難を逃れ、後に村長となったレーモン・フリュジェの「過去をそのままにして死者が報われるのか」という思いの深さが理解されてくる。

このようにして、執筆者は自らの視点によって、「ドイツ統一」を読み取り、第4章では法律を専門とする浅川がEUにかかわる重要な条約を紹介し、EUと欧州議会とについてその機構や役割に言及し、今後のヨーロッパのゆくえを考察。第5章で移民国家フランスが抱える新たな移民問題を国家と宗教とのかわりから叙述した森洋明は、イスラーム女子学生の学校でのスカーフ着用を糸口に、移民政策の柱ともいえる「ライシテ」（政教分離政策）を検討する。第6章で関本克良が交際社会における人権という視点を提供し、第7章では望月浩二が脱原子力発電の現況を豊富な資料によって分析する。さらに第8章では山本真司がイギリス文学という素材をもって英国の「独立性」について論述、最終章で五十嵐徳子は、ロシアへ出稼ぎに行くヨーロッパの女性の聞き取りから、ヨーロッパの変容をジェンダー変容として読み解こうとしている。執筆者9名の専門分野が基点となり、現在起こっているヨーロッパの状況が分析され、「ヨーロッパ」とは何なんだろうということを考えさせてくれる論文集となっている。国とは何か。国民とは誰か。トランスナショナルな視点とはどういうものか。多様性とはいったい何なのか。移民とは誰なのか。そして、異なった視点で書かれた9つの論考はたいへんに分かりやすい。ヨーロッパを考えるテキストとして、「和解」を理解する一助として、そしてEUを学ぶためにも最適であると思う。目次は以下の通り。

- 第1章 ベルリンの壁崩壊—取材ノートから (宮隆啓)
- 第2章 「ベルリンの壁崩壊」の伏線にあったハンガリーの環境保護運動 (佐藤孝則)
- 第3章 「記憶の場」としてのオラドゥール・シュル・グラヌー—独仏の和解とEUについて考える (中柁勝美)
- 第4章 EUの政治・経済統合と機構—グローバル立憲主義化という視点から (浅川千尋)
- 第5章 移民大国フランスの葛藤 (森洋明)
- 第6章 ヨーロッパの国際人権保障 (関本克良)
- 第7章 ドイツ・欧州の環境保護—脱原発 (望月浩二)
- 第8章 欧州風刺地図と英国の独立精神 (山本真司)
- 第9章 ロシアと中央アジアにおける労働力とジェンダーの変容 (五十嵐徳子)

